

第3回 東京2020パラリンピックの成功と
バリアフリー推進に向けた懇談会 開催報告

大会を機に何を変えるか。 大会後に何をのこすか。

2020年1月15日（水） 11:00～13:00
東京国際フォーラム ホールB5

パネルディスカッション

テーマ1 「円滑な移動の確保（情報提供・人的支援）」

テーマ2 「心のバリアフリーを広めるために」



東京2020パラリンピックの成功とバリアフリー推進に向けた懇談会HP
<https://www.seisakukikaku.metro.tokyo.lg.jp/cross-efforts/2020/>

小池 百合子知事 – 開会挨拶から

今日は、どのようにパラリンピック東京大会を成功させるのか、そして、パラリンピックを機会に、東京の街をどのようにハードとソフトの両面でバリアフリーにしていこうか、両方を考えるためにお集まりいただいた。

パラリンピックを通じてバリアフリーを促進していく、誰にも優しい東京をつくる、誰にも訪問しやすい、インバウンドの方でも、障害のある方でも、東京は楽に来られる、そういう街づくりをしていきたい。

パラリンピックの成功なくして東京大会の成功はない。何をもって成功かの、一つの目安が、大会会場が観客、応援の皆さんで満杯になるということ。大会会場を子供たちも含めて満杯にして、大いに沸き立つ、そんな東京大会に、皆さんと共にしていきたい。



パネルディスカッション

テーマ1 「円滑な移動の確保（情報提供・人的支援）」

ファシリテーター

高橋 儀平氏（東洋大学名誉教授）

パネリスト

稲垣 具志氏（日本大学理工学部助教）

秋山 能久氏（銀座 六雁 総料理長）

二條 実穂氏（パラアスリート（車いすテニス））

三浦 浩氏（パラアスリート（パワーリフティング））

エルド・オル・アブディン氏（学習院大学法学部政治学科特別客員教授）

テーマ2 「心のバリアフリーを広めるために」

ファシリテーター

川内 美彦氏（東洋大学人間科学総合研究所客員研究員）

パネリスト

星加 良司氏（東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター准教授）

風間 俊介氏（俳優）

倉田 秀道氏（あいおいニッセイ同和損保 企画経営部 次長）

小島 永土氏（全日本空輸 CEマネジメント室CS推進部 担当部長）

花岡 伸和氏（パラアスリート（陸上競技））

意見交換

大黒 摩季氏（シンガーソングライター）

根木 慎志氏（パラアスリート（車いすバスケットボール））

テリー伊藤氏（演出家・TVプロデューサー）

イルカ氏（シンガーソングライター、IUCN国際自然保護連合親善大使）

野村 佑介氏（精進料理 醍醐 四代目店主）

谷垣 禎一 名誉顧問 – 総括

テーマ1 「円滑な移動の確保（情報提供・人的支援）」



【高橋 儀平 氏 =ファシリテーター】

東京のあちこちで公共交通機関の工事が進んでいる。少しずつ、そしてさらに2020を越えて良くなっていくのではないかな。そういう期待感を込めてパネルディスカッションを進めたい。

東京は、外国人の方、高齢者、さまざまな障害を持っている方、LGBTの方など、もう3人に1人以上が、情報、移動などの制約を受けている。そういった人たちも含めて、安全・安心な東京、そして2020大会を越えて、さらに先に進むようなまちづくりをみんなで一緒に考えていければと思う。

【稲垣 具志 氏 -基調報告】

東京は、2020大会を迎えて、エレベーターによる段差解消、駅のホームドア、道路整備、ノンステップバス、こういったものの導入が進んでいるが、気になることがいくつかある。

①施設とか設備があれば、バリアフリーの問題は解決か

どれだけ設備を作っても困り事はなくなる。

駅ではあまりにもいろんな種類の多くの音が鳴り過ぎ、音量が大きいと、聴覚過敏の方は、もうその場にはいられない。

誘導サインは、使い方が分からない方、高い所にあるサインが見えない方もいる。歩道の横断方向を示すはずの点字ブロックが正しく設置されていないことがある。

②人のサポートは本当に連続しているか

駅の中では駅員が、バス停での乗降は乗務員が完璧にサポートする。ただ、バスを降りて鉄道駅までの間、誰がサポートするのか。

施設整備の足りないところは誰かが気付いて、サポートする必要がある。人のサポートのバトンをつないでいくのが、周りにいる私たちの役割である。

他の人に関心を持つ、それぞれの方に適した行動を選択する、コミュニケーションをとってその人の必要を捉えていくということがすごく重要。

障害を持ってるから何か対応しないとイケないという感覚ではなく、人と人との付き合いの中で、できることをやり、困り事に気付くという、ごくごく当たり前のことをやっていくこと、ハード整備も重要だが、人間と人間との社会性といったものを忘れてはならない。



【秋山 能久 氏】

オリンピック、パラリンピック、どのぐらいのお客さまが来るか、本当に全く読めない中で、来ていただくお客さまのためにどれだけ心を寄り添えて、おいしい物を食べていただき、日本の豊かさを知っていただき、そして日本を愛していただけるか考え、取り組んでいる。お店の前でお客さまをお出迎えしていると、たくさんの方々からいろいろな場所を聞かれる。スマートフォンやiPadだけでは対応できない、それを見ても分からない方々もたくさんいらっしゃる。レストランの情報以外も発信して、心をつなぎ合わせて寄り添っていくことが日本のレストランの在り方ではないか。

いろいろな方に対応するトレーニングも大事。うちのお店もバリアフリーではあるが、勉強会をスタッフでやっている。

また、私自身、小さい子供がおり、当事者になって初めて不自由さを感じる。いろんな課題を整理しながらみんなで取り組んでいければいい。

オリンピック、パラリンピックなどのボランティアの方々がたくさんの情報を持って、それを発信できること、そのためにボランティアの方々の情報の共有をしっかりと回していくことで、よりよい大会になっていくのではないかな。



【三浦 浩氏】

普段、都内の移動は、車が中心で、時々電車、バスに乗るとかなり迷う。これから5Gの時代が来るが、僕の中では三つのキーワードがある。

一つは、QRコード。点字ブロックにQRコードを埋め込んで、視覚障害者がスマホと白杖を持ってかざしていくと、ガイド案内をしてくれるもの。

もう一つは、XPAND（エクスパンド）コード。緊急避難のときのバーコードを読み取ると、自分が、どの位置にいて、どこへ逃げればいいのかという情報も見られる。また、翻訳だったりとか、外人の方にも英語で説明できたりというシステムが開発されており、非常に楽しみ。

もう一つは、ビーコン。位置情報が地下でも見られる。

この三つをうまく組み合わせると、自分がどこにいて、どこに行つてという情報が、進んでくる。外国人の方でも日本人の方でも、いろんな情報が自分の言語で見られて、どこに何があつてという案内が進んでくるという時代が、この2020年だと思う。

アブディンさんから点字ブロックが邪魔なんじゃないかという発言があつたが、僕は有効に利用させていただく。点字ブロックに沿っていくと、歩行者がよけてくれるし、道案内にもなる。



【モハメド・オマル・アブディン 氏】

ホームドア問題は、改善しているものの、まだまだ危険な駅がたくさんある。私も落ちてる。なぜ落ちるかという、駅員に頼むと相当待たされるから、自力で行こうとして、転落したりする。早く解決するとともに、視覚障害者がホームを歩いているときに、ぜひ、声を掛けていただきたい。

もう一つの問題は、障害者の全体のニーズは一つじゃない、むしろ、ぶつかることが多いこと。私も車いす生活をしたことがあるが、点字ブロックは非常に障害になっているんじゃないか。また、「誰でもトイレ」がそうだが、誰でも使えるものって簡単には作れない。誰のために作っている

かはっきりさせたほうがいい。

三つ目は、駅の移動。ロンドンの鉄道網は、東京に勝てるものではないが、一つすごく重要なサービス、VIP（Visually Impaired Person）サービスがある。改札口の横にボタンがあつて、押せば、すぐに駅員さんが飛んできて、すぐに電車に乗せてくれる。ぜひ、東京の鉄道会社と自治体が協力してスムーズな移動を確保していただきたい。

スムーズな移動＝雇用の機会が増える＝社会参加ができる。障害者が社会参加できるための制度はいろいろあるが、必ずしも一人一人のニーズにちゃんと対応しているわけではない。一人一人のニーズに対応できるようにしていかなければいけない。



【二條 実徳氏】

世の中全ての段差をなくすということは難しい。どうしても必要な段差だったり、残ってしまっている段差を、どうすれば、バリアフリーにできるかという、皆さんのソフトの部分でのサポートがあつて、真のバリアフリーになるのではないかな。

ウェブサイトとかでバリアフリーが、マルカバツかではっきり書かれていたりする。だが、決してバツな所が完全にNGというわけではなくて、段差があつても、そこをソフトの面、皆さんのサポートで解決して、マルに変えていけたらいい。そのためには、人と人とのコミュニケーションが、

本当に大切。海外遠征に行つて、日本よりも海外のほうが、車いすユーザーであろうとなかろうと、人と人とのコミュニケーションを取っているという印象がある。東京2020大会をきっかけに、いろんな方々と皆さんがコミュニケーションを取つて、そしてバリアフリーな東京になったらいいと思う。

車いすの人を見かけたときに、どんなサポートをしたらいいだろうと考えることもあると思うが、車いすの人だからこうしなければいけないというよりも、障害の有無に関係なく、何か困っている人がいれば、声掛けをするというのが、一番いいのではないかな。



【高橋 儀平氏】

共生社会のあり方の中で、よく、「みんな違って、みんないい」という言い方をするが、移動の環境も、それぞれ違う。違ったままでもいいが、それをつなごうとする姿勢を、さらに事業者、そして小池都知事にも要請したいし、いろいろな意味でみんなが一緒にやっていくべき。困難な課題は山のようにあるかもしれないが、少しずつバリアを外していくということだと思う。

テーマ2 「心のバリアフリーを広めるために」



【星加 良司氏 - 基調報告】

かなり気を付けてポイントを押さえて、パラリンピックというイベントを受け止めていかないと、心のバリアフリーの観点からは逆行する可能性が出てくる。

心のバリアフリーは、国の示すところによると、①障害の社会モデルの理解、②障害者に対して差別をしない、あるいは合理的配慮を提供すること。③コミュニケーションあるいは共感力、想像力を働かせる。この三つのポイントを押さえた理解啓発のことであるが、障害の社会モデルの理解に絞って話したい。

困っている原因が、その個人の機能障害にあると考えるのが、個人モデル。障害の社会モデルは、さまざまなルール、制度、働き方、

働く時間、あらゆるものが多数派の都合、利便性を基準にしてつくられ、この社会の偏りが原因となって、少数派が割を食っているという考え方。その偏りをできるところから変えていくムーブメントを起こしていこうというのが、この社会モデルの考え方。

パラリンピックの目指す価値のうち、公平、平等、equalityという価値を、どうパラリンピックから学んでいくか、それを考え続ける文化を東京に残していけるかが極めて重要。スポーツ、とりわけパラスポーツは、さまざまな特徴、違いのある人たちが、同じ競技に参加するためのルール、第三者が判定するレフェリング等が常に組み込まれ、公平な競争を可能にする工夫がなされている。

これを、われわれの社会生活、日常生活、学校、企業、街に置き換えてみたときに、どんなルールを作れば、どんなレギュレーションを設ければ、公平な状況で、環境で、障害のある人もない人も参加できるのかを考え続けていく。パラリンピックをそのきっかけとして位置付けられると、この社会モデルへの転換に少し近づいていくことになる。この点が非常に重要。

【倉田 秀道氏】

三つのことを、お伝えしたい。

①心のバリアフリーを当たり前のようにしたい。みんなでそうしていこう。

働き方改革が叫ばれ、共生社会、ダイバーシティ、インクルージョン、こういった社会に変わりつつあり、高齢化も進んでいる。今こそ、心のバリアフリーではないか。このタイミングを逃すと、なかなか難しいかもしれない。

②国際スタンダード

日本のバリアフリーとか、ダイバーシティ、インクルージョン、国際的に見たらどうなのか。自身の知見からお伝えしたい。ヨーロッパ、北欧方面へ行くと、部活はなく、クラブチームが主体。特別支援学校がほぼなく、幼少の頃から障害のある子も、ない子も一緒に遊んで、スポーツをし、生活をしている。選手強化に関しても、さまざまな国々のオリパラトップチームと一緒に合宿していた。ヨーロッパでは、心のバリアフリーは本当に当たり前だと感じた。

そのような背景から、混ざり合う社会を目指したいと思って活動してきた。混ざり合う社会は野菜ジュースではなく、野菜スティック。噛んだ感触や味が、みんな違う。同じステージであらゆる個性が光りながら共存することが重要。会社の活動では、障害者、雇用、障害者スポーツ支援を実施しており、アスリート雇用も進展している。選手と社員の当事者みんなでスポーツを通じて意識を変えていこうと熱い思いで取り組んでいる。その上で特にパラアスリートの活躍の場を、もっと見いだしていく。

③地域との連携

全国の自治体と連携して、パラアスリートと社員、地域住民の皆さんと、講演会・体験会等あらゆる交流活動を全国で展開している。パラアスリートのコミュニケーション能力も高まり、社会での活躍の場が、また一つできる。2020が終わった後も持続可能な活動をしていくためには、自治体と一緒に取り組むことがマストであろうと思っている。





【小島 永士 氏】

ANAは2015年に、オリンピック・パラリンピックのオフィシャルエアラインパートナーになり、そのときに、全ての人に優しい空を実現するための経営戦略を作ろうという話になった。

①空港、機内の施設設備のバリアフリー対応、ハードの対応。

②人的施策、接遇に向けた教育訓練というハート面の対応。

この2本の柱でユニバーサルサービスを推進している。

これまで、収入も多く、お客さまの数も多いビジネスパーソンに目が向いていた。これからどうあるべきなのか。ビジネスパーソンはこれまでどおり、非常に重要なお客さま。ただし、お客さまをカテゴライズするのではなく、障害をお持ちのお客さまも、高齢のお客さまも、ファミリーも、妊婦も、一つの目で見

いくことにより、全ての人に優しい空を届けることを目的として、ユニバーサルサービスの推進に力を入れている。

ハードの対応は、旅の始まりから旅の終わりまで、ご旅行前のご予約から始まって、空港に着いて、搭乗手続きをおこない、機内に入って、目的地に着くまでの体験価値を提供していこうという考え方でユニバーサルサービスを推進している。非常にお金がかかるが、障害者だけでなく、高齢者、ベビーカーを使ってるお母さん、全てのお客さまにメリットがある。それこそがオリンピック・パラリンピックのレガシーになる。

一方、いくらハードを整えたとしても、接遇に当たる社員一人一人の気持ちがこもっていないと、まさに仏を作って魂入れずということになる。マインド醸成に、非常に力を注いでいる。

社長以下、全役職員を対象にした教育、特別支援学校に向けた出張授業、本物の飛行機やシミュレーターを使った搭乗体験会。社内のセミナーでは障害者や高齢者の施設に向向いて、障害者、高齢者と交流しながら学び取る。こうしたハート施策の取組自体を、人事の諸施策と連動させ、効果的にマインド醸成を進めている。

【花岡 伸和 氏】

心のバリアって、スタートはやっぱりカテゴライズだ。

カテゴライズまではいいが、そのカテゴリーに勝手なラベルを貼る。それが負のレッテルの場合、スティグマというが、負のスティグマが多数派から少数派に向けられたときは、ものすごく大きな力になる。

障害者、何かができないからかわいそうっていう考え方は、実は勝手に思われていることであって、当事者はそうは思っていない。そういうスティグマは、どういう年齢からつくられてるのか。小学校1年生でも、こうやって元気に話してる僕を目の前にしても、なお、歩けない僕のことをかわいそうだと言う。スティグマがどこからやってくるかという、伝承、親だと思ふ。

受け継いでしまった人が、そのスティグマを拭うのに、どれぐらい時間を要したり、努力が必要なのか。合宿を年1回やっている中の1人の女子学生が、そのカテゴライズしてしまう自分と、レッテルを貼ってしまう自分に苦しみだした。それについてずっと考えて、現在、たどり着いてる答えが、世界はカラフルで、グラデーションでできてるってところ。でも、そこに行き着くのに3年かかっている。その気付いた女の子が親になったときは、恐らく子供に同じことを伝えると思う。この心のバリアを拭い去っていく、変えていくっていうのは、非常に時間がかかる。

ぜひ、東京都含め、いろんな自治体で行われているパラリンピック教育がパラリンピック後も継続してほしい。車いすに乗っているところを飛び越えて、僕のキャラクターを好きになってくれる、パーソナリティーを見てもらえる、そういう時間を子供たちと共有したい。



【風間 俊介氏】

障害がある人の助けになりたいという気持ち自体はものすごい素晴らしいことだが、実は落とし穴があるのではないかと。障害がある人の助けになりたいではなくて、困っている人がいたら助ける。この大きな枠組みで挑むことってというのが、フラットな考えなのではないか。障害がある人だから助けるっていうふうに考えること自体が、ある種一線を引いてしまっている。バリアーになってしまうのではないかと。

エレベーターがあったとしても、そのエレベーターに乗れる人数は限られている。多くの人が列を成しているとき、ベビーカーを押しているお母さんがいるかもしれない。僕は車いすの方を優先的に乗せてあげたい。ベビーカーのお母さんに声を掛けて、そのベビーカーを持たせてくれませんか、ということ

がひいては車いすの方を先に乗せることになるのではないかと。障害がある人を助ければ、それがバリアフリーなのかといったら、そうではなくて、多くの人を助けることだと思っている。

多くの人たちが、障害がある人たちは健やかで懸命に困難に戦っている人々というイメージを持ってしまっている。でも本当に人間っていろんな人がいるので、そうでない人もいる。そういう人を認識することというのが一番、僕は大事なことだと思っている。福祉の仕事長くやっていて、多くの障害がある人たちと仲良くなってきたが、大げんかをしたことがない。僕の目標は、いつか障害がある人と大げんかをして、もしかして少し絶交みたいなことになって、そして再び会ったときにまた分かり合える、そんな経験をする機会があったら、本当に心のバリアフリーを手に入れたという自負が生まれる瞬間なのかと思っている。



【川内 美彦氏 =ファシリテーター】

アンケートによると、心のバリアフリーから連想する言葉で、優しさ、思いやりを選択した人が非常に多く、権利、尊厳を選択した人は非常に少ない。

優しさや思いやりというのは、もちろん人間として必要なことだが、優しさや思いやりで平等な社会参加ができるのではなく、平等な社会参加という基盤がある上で、どうやってその質を高めるかというところで優しさや思いやりが必要になる、そのことを私たちは間違えてはいけない。

心のバリアフリーは、お互いの人権や尊厳を大切に、支え合う共生社会を目指すことだということを私たちは確認すべきであって、決してそれが短絡的に優しさや思いやりのことだと思てはならない。



懇談会の様子



【大黒 摩季 氏】

母が重度の障害者で、一人で介護していて感じたことを言わせていただく。

今ここにいる障害をお持ちの方、いろいろいらっしゃる方自体が、もう私にとっては崇高なポジティブな方々。いろんなところが折れちゃって、家に閉じこもってばかりしかいられないような人たちを、どうか置き去りにしないで、その方たち、その毎日と戦っていらっしゃる方の意見をどうかたくさん吸い上げてほしい。

母が車いすになってから、自分が切り盛りできるコンサート会場は、段を付けて、みんなで乗っけて、誰に立たれても大黒摩季がきちんと見えるようにするようになった。スロープは、時間がかかる人たちののに外側で、ぐるぐる回されて。エレベーターも、

例えば武道館だったら真裏だったり。そして席は、一番スタンドの奥で、立たれたら何も見えない。そういう人たちの小さな声をこういうところで汲み取っていただければということだけはお伝えしたい。もう挑んでいる方はたくさんのバリアーを越えていける。バリアーの中で小さくおびえている人たちの声をどうか聞いてほしい。

【根木 慎志 氏】

パラリンピックの究極のゴールはIPCが定めているが、インクルーシブな社会の創出。その中に星加先生の話のパラリンピックが目指す価値があるということをもっともっと知らせることが必要。

年間200くらいの学校を訪問して、パラリンピックの競技を通じて違って何だろう、障害って何だろうということを伝えている。

パラスポーツを通じてバリアフリーとかインクルーシブとか、違いを認めるということができたらよい。



【テリー伊藤 氏】

先日、根木さんとボッチャやらせてもらった。それまで実は根木さんとは敬語でしゃべっていた。でも、ボッチャやっていると、「おまえ、なにドジっているんだよ」「ふざけんなよ」と、そういう話になる。だから、同じ目標があって一緒にやるといい。駒沢公園で、目の不自由なランナーの方と一緒に伴走している。すごく速くていつも負けているので、「速く走り過ぎ」と文句を言っている。それもまた仲良くなれる一つの理由。ぜひ一緒に何か目標を持って、優しさを与えるとかじゃなくて、みんな仲間だから、そういう感じでやるといいんじゃないか。

【イルカ 氏】

障害者という言葉が、どうも自分の中ではしっくりこなくて、なぜかということが、今日とてもクリアになった気がした。その人が持っているものが障害ではなくて、その人を囲んでいる社会に障害がある、そしてその社会の障害に向かっていこうという人たちがたくさんいることが非常にうれしく思った。

具体的に一つだけお願いがある。私は1972年からビーガンだが、どこへ行っても食事に大変、不便だ。海外からいらした方が日本のレストランやあらゆるところへ行ってもう右往左往、ものすごく困っているを見て、他人ごとではない。おそば屋さんに入って、スープは何でできているか聞いても、英語で答えられず、表示もない。アレルギーや宗教的な問題があって、深刻に食べられない方で、自分が持ってきたパンしか食べていないという方もいる。

だから、食関係の皆様、一品でいいので、野菜だけのものを何か用意していただきたい。



【野村 祐介氏】



イルカさんのお話には、精進料理の店の観点からお話しする。東京に12万人、世界には6000万人以上、ビーガンをやられている方がいる。もちろん、ビーガンだけでなく宗教的な観点、体調、アレルギー、環境保護の観点、いろんなところで何かを抑えているというお客さまはいる。この2020年にインバウンドの多くのお客さまを日本にお迎えするにあたって、秋山さんの話のとおり、日本の良さというのを食体験、気持ち、いろいろなものを通して世界に発信していけたらよい。

このパラの大使のお話をいただいたとき、何か自分ができることがないかと、そういう気持ちで受けた。ただ、その気持ちというのがどこかおどっている気持ちがあったのではないかと。パラリンピックの競技を観戦して、何かやってあげるといった感覚自体が間違っていたと思った。

今日の話聞いて、二転三転、考えた。パラリンピック、もしくは障害、バリアフリー、いろんな言葉に対して、みんなが考えるきっかけを与え続けてくれるといいのではないかと。

谷垣 禎一 名誉顧問 — 総括



今日は、この2020のパラリンピックが、我々がどういう社会をつくっていくかについて、大きなインパクトを与えているということを実感できた。2020が終わっても、こういう刺激は途切れることなく、大会が終わったらおしまいということにさせてはいけない。

また、人によってさまざまだが、私はリハビリをやっていると、体を動かすのが好きなんだ、いい気持ちだと思ふことが多々ある。このパラリンピックを機会に、障害があってもなかなか体を動かす、スポーツをやるような機会がないと思っていた方が、もっと自由に体を動かすことができる環境をぜひ整えていきたい。

小池 百合子知事 — 閉会挨拶

2度目のパラリンピックを行うのは東京が世界で初めてとなる。日本の成長のきっかけになったのが1回目の64年東京大会であるならば、東京2020大会は、持続可能な成長と成熟のきっかけでなくてはならない。今日のパラバリエで話し合われたさまざまな観点を盛り込みながら、大会が終わった後もこの成熟社会がさらに良くなっていく、そのための努力を続けていかなければならない。

本日は、本当に皆さま方のご協力により、とても会議が意義深いものになった。この果実をぜひ東京2020大会、パラリンピック、そこからまた新しいストーリーを共に描いていきましょう。

第3回 東京2020パラリンピックの成功とバリアフリー推進に向けた懇談会 出席者

【懇談会メンバー】

名誉顧問 谷垣 禎一 氏

座長 小池 百合子 知事

学識経験者（五十音順、敬称略）

氏名	役職等
稲垣 具志	日本大学理工学部助教
川内 美彦	東洋大学人間科学総合研究所客員研究員
高橋 儀平	東洋大学名誉教授
星加 良司	東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター准教授

パラアスリート（五十音順、敬称略）

氏名	役職等
高桑 早生	2012ロンドン・2016リオデジャネイロ大会出場（陸上競技）
二條 実穂	2016リオデジャネイロ大会出場（車いすテニス）
根木 慎志	2000シドニー大会出場（車いすバスケットボール）
花岡 伸和	2004アテネ・2012ロンドン大会出場（陸上競技）
三浦 浩	2012ロンドン・2016リオデジャネイロ大会出場（パワーリフティング）
葭原 滋男	1992バルセロナ・1996アトランタ大会出場（陸上競技） 2000シドニー・2004アテネ大会出場（自転車競技）

各界の方々（五十音順、敬称略）

氏名	役職等
秋山 能久	銀座 六雁 総料理長
猪狩 ともか	タレント（地下アイドル・仮面女子）
イルカ	シンガーソングライター、IUCN国際自然保護連合親善大使
大黒 摩季	シンガーソングライター
風間 俊介	俳優
テリー伊藤	演出家・TVプロデューサー
中畑 清	プロ野球解説者
野崎 洋光	分とく山 総料理長
野村 祐介	精進料理 醍醐 四代目店主
萩本 欽一	タレント
林家 こん平	落語家
林家 三平	落語家
眞鍋 かをり	タレント
エイト・マル・アディン	学習院大学法学部政治学科 特別客員教授・ 特定非営利活動法人スーダン障害者教育支援の会代表理事

【東京都「心のバリアフリー」好事例企業】（五十音順、敬称略）

氏名	役職等
倉田 秀道	あいおいニッセイ同和損害保険株式会社 経営企画部 次長
小島 永士	全日本空輸株式会社 CEマネジメント室 CS推進部 担当部長

東京2020パラリンピックの成功と
バリアフリー推進に向けた懇談会HP



<パラ応援大使公式SNS>

 **twitter**
@TMGparaspo_Ambs



 **Instagram**
tmgparasport_Ambs

